様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：３２６４０
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520108
研究課題名（和文）　四国地方における仏像の造像圏とその形成過程に関する研究

研究課題名（英文）　Research on a Buddhist statue creation sphere in the Shikoku region, and the process of its formation.

研究代表者
青木　淳（AOKI ATSUSHI）
多摩美術大学・造形表現学部・准教授
研究者番号：00305806

研究成果の概要（和文）：四国とそれを取り巻く地域（九州東部、瀬戸内、紀伊半島西部）の文化的な特性について、その具体像について、仏像の様式の分類と解析からひも解いていった。特に紀伊半島西部地域と四国東部地域、四国中山間地域における山岳仏教圏における類似した造像、九州東部（豊後～日向地域）と大陸（中国山東省、四川省、朝鮮半島）との造形的な関係についていくつかの具体的な事例が確認された。また仏像製作における「造像圏」という概念を、特に四国地方の仏像から解読してゆく試みとして本研究を位置づけた。

研究成果の概要（英文）：This paper presents a detailed image of the cultural characteristics of Shikoku and surrounding areas (eastern Kyushu, Setouchi, western Kii Peninsula) by classifying and analyzing styles of Buddhist statues. In particular, several specific cases of formative relationships were confirmed between the western Kii Peninsula and similar statue creation in eastern Shikoku, the ascetic Buddhist culture in mountainous parts of Shikoku, eastern Kyushu (Bungo to Hiuga) and the continental mainland (Shandong and Sichuan Provinces in China, and the Korean Peninsula). In addition, this research is significant as an attempt to decipher the concept of a “creation sphere” in the production of Buddhist statues, especially based on Buddhist statues in the Shikoku region.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,777,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：地方仏、文化交流圏、造像圏、瀬戸内、四国

１．研究開始当初の背景

仏像の造像圏という概念は、まだわが国では定着していない。しかし仏像の様式論を展開する過程で、時代様式と併せてこうした地方における造形の特性をあらためて論ずる必要がある。それは、「いかに中央様式の影響下にあるか、または類似しているのか」という尺度での研究はなされてきたが、一方で独立した文化的環境をそなえた地方における、独自の文化的表情が生み出されてきたこ

とへの提言はほとんどなされてこなかった。そうした問題を含む地域の仏像の分布やその様式研究の方法に拠りひもといてみたいと思った。

そうした意味でこの四国地方は、四方を海に囲まれていること等から一定の閉塞性（小さな共同体の単位）とともに、海を通じて結びつけられた地域（大きな共同体９との文化的な相互関係を読み解くモデルになるのではないかと考えた。

２．研究の目的

「独立した文化的環境をそなえた地方における、独自の文化的表情」を読み解くことは、特に歴史的な記録、遺物、史料の乏しい地域にあっては、新たな研究の指標にもなると考える。そうした地域の一つがこの四国地方を取り巻く文化圏（文化交流圏）である。

本研究を進めるにあたり、かつて私は勤務地であった高知県並びに四国一円、紀伊半島といった地域における仏像の「造像圏」に関する試験的な研究を行ってきたが、本研究で特に注目されるのが行政的な、またはかつての民俗的な単位としての地域性ではなく、仏師や大工といった職能民たちの往来が実に頻繁になされていたことを仏像の造形表現やその像内納入品資料などから確認できたことである。

四国地方の地理的な特色は、周知のように四方を海に囲まれているが、それぞれに異なった海洋（沿岸地域）と山岳地域の文化を持っていること、また吉野川や仁淀川、四万十川といった大河川が広い流域を持っている。本研究ではこうした、歴史や習俗に裏付けられた四国の地域特性を、地域の仏像の分布やその様式からひもとくという手法を用いてみたいと思った。

３．研究の方法

本研究は基本的には、四国各地に伝来する仏像の調査を基底として行うことになるが、すでにこれまで約 10 年間かけて高知県地域文化遺産共同調査・活用事業プロジェクトなどで培ってきた四国地方の仏像調査の経験を元に、新たに以下にあげるような視点と研究の指針を提起してみたい。さらにこうした研究のアプローチとその解析を通じて、新たな地方における仏像史の研究方法論を構築してみたい。

(1)飛鳥時代から奈良時代にかけて（７～８世紀）の金銅仏を中心とする約８０作例について、伝来、類例比較、造像技法等に関するデータベースの構築、制作年代、製作地にかかわる同定作業。ならびに初期木彫像に関するデータベースの年代、製作地にかかわる同定作業。

これらは全研究機関を通じての基礎研究に当たるもので瀬戸内沿岸の金銅仏ならびに廃寺遺物の調査と研究を進めたい。愛媛・興隆寺如来立像は法隆寺四十八体仏などにも類例が認められるもので、香川・与田寺誕生仏なども含めて朝鮮系のものと思われる作例が多く見られ、改めて精査してみたい。また香川・善通寺の塑像頭部は破損仏であるが四国地方では類例も少なく、近年高知県中央部から確認されている同時代の専仏や他の地域から例を見ないおそらく朝鮮形式の特殊な瓦片などとの比較を試みたい。奈良時代に関しては、香川・願興寺聖観音菩薩坐像は、畿内から海を隔てた地域のものとして注目されるものだが、これなどは岐阜・美江寺十一面観音像、また初期一木造の香川・正花寺菩薩立像など奈良時代末期における地方作例の系譜をここでは畿内のものなどと比較しつつ、３D あるいはモルフィングなどの技法を用いて新たな解析を試みたい。

(2)環四国地域における海浜部の造形の特色と信仰の諸相

四国内における不陀落渡海などの遺跡の調査と平行して高知県室戸市椎名観音堂十一面観音像、近年造像勧進に関わる像内納入品資料が確認された足摺岬金剛福寺千手観音像、香川・志度寺十一面観音像などの信仰の問題からその造形の意味を紐解いてみたい。

(3)仏像に見る四国中部山間地域の仏教文化について

四国四県を分断するように横たわる四国山脈地域の仏像についての調査と研究で、近年たとえば平安時代中期に造立された高知・豊楽寺諸尊、定福寺諸尊、徳島・龍光寺阿弥陀如来像といった地方作例に類似した作例がこの中部山間地域を中心ときわめて重要な問題を含んでいるものと考えられる。して広範囲で確認されており、これらは平安時代における四国地方の造像圏の問題を考える上で重症な視点と考える。

(4)院政期における造形の中央志向とその地方的展開の諸相

院政期に地方への文化移入は急速に活性化する。こうしたことは東北にしても九州地方についても言えることだが、四国においてもまた中央の様式が直接的に流入してくると同時に、すでに培われてきた地方様式の仏像とが混在した形で伝来する。そうした問題を高知・金林寺不動明王、毘沙門天像、徳島丈六寺聖観音坐像、愛媛・太山寺十一面観音

群像、香川・法蓮寺不空絹索観音像などからそこにある独自性について考えてみたい。

(5)鎌倉時代中期における仏師の動向に関する研究
鎌倉時代の四国はさらに平家から源氏への政変の移動の影響を受け、高知・雪蹊寺の仏像群を造立した湛慶一門、香川・予楽寺不動明王の作者など、運慶・快慶の第二世代の第二世代を担う仏師たちが多くの作品が残されており、その背景を明らかにする作業が残されている。

(6)近世の四国地方における造形作家と修復に関する研究
近世の四国の仏像は円空や木喰のような個性的な作家は流入しなかったが、やはり中部山間地域には修験系の行者が多く集まり、剣山、石鎚山といった修験のメッカとその周辺部にある神仏習合の信仰の場において無名の仏師たちがひしめき、合わせて京より仏像修復を行う仏師の存在が確認されている。この現象は近世における四国地方と畿内や中国地方において展開した文化交流圏の問題を紐解く際に重要な鍵となるものと考えられる。

(7)四国の仏像に見る東アジア地域を含む対外交易圏の研究
島国である四国の特性を考える上で、その総括の中で必要不可欠な問題は、文化的な交易圏の問題である。瀬戸内沿岸に関する海運や交易に関する研究は、古代中世を通じて歴史学的な実証的な研究成果が紹介されてきたが、その一方で美術史、宗教史といった視点からその地方の精神史に支えられた文化的な表象を明らかにした研究は見当たらない。
本研究ではこうした研究の状況をふまえ、紀伊水道から瀬戸内沿岸、さらには豊後水道に至る地域での信仰史と造形表現の持つ意味に関する研究を進めてみたいと考えている。かつて瀬戸内沿岸の諸仏について今回の実査を通じてその造仏の足跡と造像圏について検討を行ってきたが、やはり将来的には大陸との文化交渉史という視覚から探ってゆく。

４．研究成果
本研究では、以下のような研究課題によって各論（地域文化研究、美術史、宗教文化史、交流史等）の視点から研究を進め、具体的な作品と調査地における成果をあげることが出来る。

(1)特に紀伊半島西部地域と四国の東部地域はかねてより地形、気候、民俗や方言の類似性が指摘されてきた地域だが、仏像に関して例えば、和歌山・法音寺十一面観音像などと高知・名留川観音堂観音像等の造像様式の類似などを確認された。

(2)四国中山間地域における山岳仏教圏における類似した造像例として高知・豊楽寺、定福寺仏像群と徳島・龍光寺如来像等の比較と関係作例の調査を実施した。この事例は仏像製作における「造像圏」という概念を、特に四国地方の仏像から解読してゆく試みとして本研究を位置づけた。

(3)九州東部（豊後～日向地域）、中国地方と大陸（中国山東省、四川省、朝鮮半島）との造形的な関係について、大分・万徳寺如来立像と中国・山東省青州仏像群の造形様式の共通点を確認した。
この問題は５～７世紀に中国東南部で製作された仏像のいくつかの石仏の装飾様式が、我が国の木彫像と共通したものが確認されることから、今後８～12 世紀にかけて造立された仏像、特に「檀像風」と称される仏像研究の基底に不可欠なものと考える。今回は中国・山東半島の仏像群のわが国への影響を、その門戸となる瀬戸内沿岸の仏像群と比較してみたが、将来的には遼東半島や朝鮮半島周辺の仏教文化の拡がりについて改めてみてゆきたいと思う。

(4)鎌倉時代中期における仏師の動向に関する研究として、高知・青龍寺地蔵菩薩像の像内に仏師湛慶の弟子「慶誉」の名が確認されるなど、高知県地域において鎌倉彫刻の第二世代～第三世代をになう慶派仏師の作例が多く確認された。
こうした事例などは都鄙間を往来する仏師の動向を考える上で注目すべき事例と考えられる。あわせて、今回調査を行った九州南部、熊本県明導寺阿弥陀三尊像、同県城泉寺阿弥陀三尊像における同じく鎌倉時代第二世代をになう仏師たちの作例が確認されていること等と併せて検討すべき事例であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①<u>青木　淳</u>、「仏師快慶と石清水八幡宮」（『日本宗教文化史学会』15(1)、査読あり　69-89頁、2011年

②青木　淳、末法の世に広まる「作善」という考え、仏像の知られざるなかみ、査読無、別冊宝島 1988、2013 年pp. 46-48

③青木　淳、仏師快慶と『平家物語』創作の「場」、仏像の知られざるなかみ、査読無、別冊宝島 1988、2013 年pp. 88-89

④青木　淳、東大寺僧形八幡神像と快慶のサロン、仏像の知られざるなかみ、査読無、別冊宝島 1988、2013 年、pp. 92-93

⑤青木　淳、戦乱の時代に存在したアジール、仏像の知られざるなかみ、査読無、別冊宝島 1988、2013 年、pp. 94-97

〔学会発表〕（計 1 件）
①青木　淳、運慶と快慶−像内納入品にみる二つの個性−、日本宗教文化史学会、2010 年 5 月 29 日、同志社大学

〔図書〕（計 3 件）
①青木　淳　他、浄土宗/浄土宗総合研究所、改版増補・浄土宗大辞典（運慶／快慶／行快など 20 項目）、2011 年、pp. 1200

②青木　淳（監修）、『日本の仏像巡礼』（徳間書店）、2012 年、pp. 103

③青木　淳（監修）、宝島社、『仏像の知られざるなかみ』、2012 年、pp. 111

６．研究組織
(1)研究代表者
青木　淳（AOKI ATSUSHI）
多摩美術大学・造形表現学部・准教授
研究者番号：00305806